

2020年4月20日

新型コロナウイルス感染におけるヒドロキシクロロキン投与と眼科検査

ヒドロキシクロロキン〔正式な薬剤名はヒドロキシクロロキン硫酸塩 (hydroxychloroquine sulfate : HCQ)〕は、皮膚エリテマトーデスおよび全身性エリテマトーデスに対する治療薬として、日本では2015年7月にプラケニル®錠が承認されました。長期投与におけるまれな合併症として網膜障害があり、視力や視野検査、網膜構造をみるOCT検査*等が施行されます。すでに眼疾患を有する場合もあることから、投与前に眼科でベースラインデータを記録します。

世界中で新型コロナウイルス感染に対する治療が模索されていますが、明確なエビデンスには乏しいものの、日本でも各施設における倫理委員会の承認のもとに重篤な新型コロナウイルス感染患者に対してヒドロキシクロロキンが投与される可能性があると思われまます。この場合には、投与前および投与後の眼科検査は必要ありません（現時点では、検査しなくてよいと考えられる）。具体的な理由として、以下の3つが挙げられます。

- (1) ヒドロキシクロロキンの眼科副作用は、長期投与後（通常は2～3年内服後から）にみられることが分かっており、半年以内の短期投与では眼科副作用は発症しない。
- (2) 新型コロナウイルスによる肺炎の重篤さを考慮すると、往診にならざるを得ず、視野検査、OCT検査等を実施できない（往診で得られる情報に限界がある）。
- (3) 新型コロナウイルス感染患者の諸検査を眼科外来で実施した場合には、医療従事者や外来患者が感染するリスクが高まる。

何らかの眼科情報が必要な場合には、かかりつけ眼科医への問い合わせ、ないしは問診レベルでの情報をもとに判断することが実状に即していると考えられます。

新型コロナウイルス感染から完全に回復して、見えにくい等の眼症状がある場合には眼科検査を実施ください。その場合も、ヒドロキシクロロキンによる眼障害である可能性はきわめて低く、投与前の状態や、新型コロナ感染の治療に用いた薬剤等を考慮し、総合的に判断ください。

注意：本文書は、新型コロナウイルス感染におけるヒドロキシクロロキン投与を推奨するものではなく、承認するものでもありません。眼科検査の必要性について述べたものです。ヒドロキシクロロキン投与後の全身状態悪化、他剤と併用した場合の網膜障害の報告も出ており、新型コロナウイルス感染における全身および眼への副作用については明らかではありません。

*OCT：光干渉断層計（optical coherence tomography）、非侵襲的に網膜の断層像を撮像する検査

参考文献

[近藤峰生，篠田 啓，松本惣一，横川直人，寺崎 浩子：ヒドロキシクロロキン適正使用のための手引き. 日眼会誌. 120：419-428, 2016.](#)

新型コロナウイルス感染症眼科対策会議
公益財団法人 日本眼科学会
理事長 寺崎 浩子
公益社団法人 日本眼科医会
会 長 白根 雅子